

## 「うまい酒は旅をしない」

一般財団法人 経済調査会

羽根田 芳明

### 1. ウイスキーの島へ聖地巡礼

「アイラ島」と聞いて、一体どれだけの日本人がその存在を知っているだろうか？

スコットランド西岸の南端部に位置し、淡路島とほぼ同じ大きさで人口は3千数百人程度。渡航には1社しかないコンピューター路線か、スコットランドのグラスゴー付近の港町から出ているフェリーを使うしかない。それだけ聞くと、どこの国にもあるただの離島のようにしか思えない。しかし、そんな“ただの離島”は、島の主産業であるウイスキーをもって、一部の物好きを「一生のうちに一度は訪れたい。」と、まるで巡礼すべき聖地と思わせるほどに魅了し続けてきた場所でもある。

昨年の寄稿文でウイスキーについて書かせていただいた通り、私も物好きの1人で、アイラ島のウイスキーを初めて口にしてから10年目となる今夏、念願かなって聖地巡礼を達成できた。

前置きが長くなったが、今回は、アイラ島で過ごした3日間の紀行文としたい。

### 2. 「何も無い」ということの素晴らしさ

日本語で「アイラ島」とインターネットで検索すると、見事なまでにウイスキー関連のウェブサイトしかヒットしない。かく言う私も、実際にそこを訪れるまでは「とてつもなくクセの強いウイスキーの産地」としてしか認識していなかった。それはある意味正解で、ウイスキーの蒸留所以外は名所はなく、「島内で高い建造物は？」と聞かれると、蒸留所とその煙突くらいしか思い浮かばない。遠く離れた日本では、蒸留所巡りくらいしか取り上げられないのも納得だ。実際に空から見た時の第一印象も「だだっ広い何も無い島」だった。



アイラ島上空  
写真中央の白っぽい場所はARDBEG蒸留所

しかし、そこは「何も無いが都会には無い全てがある」、そんな場所でもあり、豊かで美しい自然

に溢れた景色に幾度となく心奪われ、息をするのも忘れるほどに魅入られてしまった。

右の写真のように、どこまでも広がる草原と海岸線は、長引く梅雨で鬱屈とした心を曇りなく晴らしてくれるようで、そして時折顔を見せる隆起した岩肌や、打ち捨てられたように遺っている中世の教会跡から漂う寂寥感が相まって、どこか現実離れした美しさという印象だ。



視界を遮るものは何もなく、開放感にあふれていた



中世の教会跡  
写真右の十字架は8世紀のものとのこと

私が今回滞在したPort Ellenという港町は、島の西側に点在するLAPHROAIG(ラフロイグ)、LAGAVULIN(ラガヴァリン)、ARDBEG(アードベッグ)蒸留所の最寄りの集落だ。

蒸留所へ至る道は起伏ばかりで、徒歩と自転車のみでの移動は、前日までの約12時間のフライトとその後の列車旅行を終えたばかりの身にはだいたい堪えた。(実はアイラ島直行ではなく、ロンドン到着後すぐに寝台列車に乗ってエジンバラも訪れていた。)

島の景色は、身も蓋もないことを言えば、行けども行けどもただ草原と海岸線が広がるだけだ。だが、坂を上り切って目に飛び込んでくる風景は、その度に全く違った姿を見せ、上り坂を越えると気づけばいつも自転車を降りてその眺望の虜になっていた。

アスファルトとコンクリートに囲まれ、1日の大半を、液晶画面を眺めることに費やす日常から抜け出さない限り、間違いなくお目にかかれない絶景だ。滞在初日は感動しっぱなしで、危うく滞在2日目に控えていた5時間を超す蒸留所見学ツアーを忘れそうになっていた。

### 3. “広い湾のそばの美しい窪地”で

「とてつもなくクセの強いウイスキー」と前述したが、アイラ島のウイスキーを飲んだことのない方のためにどのような風味か説明すると、「燻されたような磯臭さ」や「薬品臭いスモーキーさ」であったり、あるいは「正露丸のような」と揶揄されるほどで、大好きになるか大嫌いになるか極端に分かれる味だ。

この特徴的な香りは、アイラ島の風土に起因する所が大きいと、様々な媒体で説明されている。シンプルに言えば、原料の大麦を乾燥させるために燃料として燃やされるピート(泥炭)の煙が大麦に付着し、熟成のためにウイスキーが置かれる貯蔵庫が海の目の前にある(年を経るにつれ樽からウイスキーが自然に蒸発していき、空気が入り込む)のが、燻されたような磯臭さの大きな要因だ。ちなみにピートとは、植物が十分に分解されずに堆積した土のような可燃物で、アイラ島のそれは土地柄、海藻を多く含んでおり、燃やされた時に出る煙はかなり独特な匂いを発している。

LAPHROAIG蒸留所内での見学では、発酵中の麦汁や蒸留途中の透明なウイスキーの味見ができ、先述のピートが燃やされる窯にも自分自身が燻されるほどに近づくことができ、そのユニークな風味が生み出されるのを、まさに身をもって体験できた。



ピートがくべられている窯  
その日1日中、体からピート臭が  
取れなかった

蒸留所ツアーは、正午から夕方5時半までの長丁場で、蒸留所内での生産工程の見学に加え、蒸留所の敷地を出て、仕込み水の源流やピートの採掘場まで巡り、最後に3つの原酒を試飲して気に入った原酒の1つを、なんと自分の手で瓶詰め(250mlでやや少なめ)して、お土産として持たせてくれる素晴らしい内容だった。

ウイスキーが造られる工程は、書籍、インターネットで数多く取り上げられているため、ここでの言及は割愛する。仕込み水の源流近くでは昼食を食べながら、ピートの採掘場では色々な解説を受けながら、カラッと晴れて心地よい青空のもとLAPHROAIGを何杯も試飲させてもらった。さらに、蒸留所に戻ってからも、樽から出したばかりの原酒の試飲をさせてもらう夢のような行程であった。

「ただ飲んだくれていていいだけではないか。」そう思われてしまうかもしれないが、ぐうの音もでないほど、全くその通りである。

だが、日本から9,500kmも離れた生産地の、しかもその水源近くで、独特な風味の源となるピートの採掘場で、潮風を感じながらその風土が生み出した酒を飲み、そして貯蔵庫内で自分が持ち帰る原酒を吟味するような体験に、文字通り、酔いしれずにはいられなかった。

ちなみにLAPHROAIGという名前は、ゲール語という現地で古くから話されている言葉で「広い湾のそばの美しい窪地」という意味で、確かに公道から蒸留所までの道は緩やかな下りになっており、古くからの地形の名残りも感じ取れた。



LAPHROAIGの水源地  
写真に写っている方は、蒸留所のガイドさん



ピートの採掘場 掘り出されたピートは、しばらく天日干し(放置)される



この3つの原酒を試飲して、お土産用に1つ選ぶ「もう十分です…」と断るくらい、試飲させてくれる



樽から原酒を汲みだして、瓶詰めまで体験させてくれる。写真左は筆者

#### 4. 心残りとしきない憧憬

蒸留所見学で持ち帰ったLAPHROAIGの原酒は、通常は最初にバーボン樽で熟成させるところ、シェリー樽を使用した8年物で、LAGAVULINでは蒸留所限定販売、かつ6,000本限定の19年物を見つけ、なかなかの珍品を持ち帰ることができた。

しかし、滞在3日目に参加したLAGAVULIN蒸留所の見学ツアーは、時間の都合で簡素なコースへの参加に留まり、また美味と評判の地元のラム肉や、絶品と言われる生牡蠣のアイラウイスキーがけにありつけなかったのは、未だに心残りだ。

ここまでつらつらとアイラ島での見聞を書かせてもらったが、『もし僕らのことばがウイスキーであったなら』という、村上春樹氏のアイラ島(とアイルランド)旅行記をまとめた本でも、この寄稿文よりも遥かに巧く、そして美しい表現で、アイラ島の良さが書かれている。その本のあとがきに、「うまい酒は旅をしない」と格言じみた言葉が登場し、簡単に言うとそれは「地のものは、そこで味わうのが一番うまい。輸送過程や運ばれた土地の気候で、そして心理的に、微妙に味が変わってしまう。」という内容だ。

今回の寄稿文のタイトルとしてその言葉を拝借しているが、先ほど紹介したとおり2本のうまい酒を旅させてしまった。しかし、蒸留所で購入して持ち帰ったLAGAVULIN 19年を口に含む度、最初にガツンと来るスモーキーな香りは、蒸留前の麦汁の発酵臭とピートが焚かれる匂いを漂わせる蒸留所脇の上り坂を汗だくになって歩いた記憶を、スモーキーさの後に口内に広がる甘く華やかな香りは、突き抜けるような青空とどこまでも広がる平原、そしてそこに自生する美しい花々を想起させてくれる。

それはまるであの夢のような夏の3日間へ連れ戻してくれるようであり(不思議なことに日本の量販店で購入した定番品のLAGAVULIN 16年を飲んでも、そうは感じない)、これは私見だが「うまい酒は旅をしない。」の後に、「また自分に旅をさせてくれる。」と付け加えたい。

アイラ島はそこまで大きな島ではないが、私が今回歩き回ったのはそこのごく一部で、他にも訪れたい蒸留所はいくつもある。食べ損ねた地元の名物もあるし、今回見た以上に美しい景色もあるに違いない。

日本に持ち帰った2つのボトル、その貴重な約1リットルを飲み切るのは1年後か、それとも2年後だろうか。

飲み切ったその時、きっと私は、またアイラ島へ行かずにはいられなくなっているのだろう。



LAPHROAIG蒸留所（左）とLAGAVULIN蒸留所（右）



どちらも海辺まで数mという近さだ



道幅も狭く、「必要最低限しか人間の手を加えていない」という印象だった



離島であっても園芸好きな国民性は変わらないようで、蒸留所には色とりどりの草花が植えてあった



蒸留所の壁に名前が大きく書かれているのは、海（船）から見た時に、目的地の蒸留所を間違えないようにするためらしい



イギリス本土からフェリーで来る人も多く、長閑な島には不釣り合い（良い意味で）な英国車も多く停まっていた

## 出典

1. 村上春樹（1999年）『もし僕らのことばがウイスキーであったなら』 平凡社